様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	芸術系コース（音楽）／森　正

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

学校現場において、音楽を専門として大学で勉強してこなかった他の教員からの、ピアノに関する質問等に応じることができるように、ピアノの演奏に関して、学生一人ひとりの演奏技術及び表現技術の向上に努める。また同時に、コアカリの授業等を通して、実際に授業で取り扱われる機会の多い歌唱教材のピアノ伴奏に関して、授業ではテンポやバランス、音量等、具体的にはどのような点に配慮して演奏されるべきであるかを学習させる。

2．点検・評価

学校現場において，音楽を専門として大学で勉強することのなかった他の教員からの，ピアノの演奏及び楽器の管理等に関する質問等にも応じることができるようにするため、ピアノの演奏に関して専門性を高めることを授業の目的とし、学生一人ひとりの演奏技術及び表現技術の向上に努め成果をあげることができた。また初等中等教科教育実践の授業等を通して、実際に小学校や中学校の授業で取り扱われる機会の多い歌唱教材のピアノ伴奏に関して、学生が本学に入学するまでに受けていたピアノ独奏を主とする教育内容とは異なる、テンポやバランス、音量等に配慮して演奏されなければならない点を中心に授業では具体的に学習させ，実地教育等で実際に生徒の歌う歌にどのように伴奏するべきかを学習させた。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

３年、４年の学部生については、コースの主催する学内演奏会に出演させるなど、卒業研究に向けた準備を円滑に進めさせると同時に、教員採用試験を含め、卒業後の進路に関して積極的な指導を行う。

課題研究を受け持つ３名の長期履修の大学院生については、教員採用試験に向けての準備状況等の把握に努め、適宜必要なアドヴァイスができるようにする。

課題研究を指導する韓国からの留学生に対しては、学業および生活面について可能な限り援助できるようにするため、頻繁に面談をおこない、本学での研究が充実したものになるように努める。

２．点検・評価

３年生4名、4年生１名の学部生については、コースの主催する学内演奏会に出演させ人前で演奏する機会を与えるなど、卒業研究に向けた準備を円滑に進めさせると同時に、教員採用試験を含め、卒業後の進路に関して積極的な指導を行ない，４年生の学生は徳島県の中学校教員採用試験の１次試験に合格した。
課題研究を受け持つ2名の長期履修の大学院生については、教員採用試験に向けての準備状況等の把握に努め、適宜必要なアドヴァイスをし、また教員採用試験と同時に準備を進めなければならない課題研究についても、必要な指導を行なった。
課題研究を指導する韓国からの留学生に対しては、学業および生活面について可能な限り援助できるようにするため、頻繁に面談をおこない、本学での研究が充実したものになるように指導を行なっており、演奏、論文の両面において成果をあげることができた。

Ⅱ－２．研究

１．目標・計画

1.小林苳子元教授と、ベートーヴェンおよびドボルザークの作品を中心に、室内楽の演奏方法に関する共同研究を行い、その成果を10月に大阪で行う演奏会で発表する。
2.ベートーヴェン、シューベルト、ドビュッシーのピアノ独奏作品の演奏方法に関する研究を行い、徳島と東京で行うリサイタルでその成果を発表する。

２．点検・評価

1.ベートーヴェン、シューベルト、ドビュッシーのピアノ独奏作品の演奏方法に関する研究を行い、その成果を6月に徳島と東京で行なったリサイタルでその成果を発表した。
2.小林苳子元教授と、ベートーヴェンおよびドボルザークの作品を中心に、室内楽の演奏方法に関する共同研究を行い、その成果を10月に東京と大阪で行なった演奏会で発表した。

Ⅱ－３．大学運営

１．目標・計画

大学院の学生定員の充足を目指し、積極的な広報活動を行う。特にこれまでの入試において、ピアノを専門とする学生を進学させてきた宮崎大学、岡山大学、大阪音楽大学のピアノ担当教員とは、互いに学生の様子を報告する等、密な連絡関係を維持し、今後の本学大学院への進学を学部生に勧めていただく。

２．点検・評価

大学院の学生定員の充足を目指し、積極的な広報活動を行なった。特にこれまでの入試において、ピアノを専門とする学生を進学させてきた宮崎大学、岡山大学、大阪音楽大学のピアノ担当教員とは、学生の様子を報告する等、密な連絡関係を維持し、今後の本学大学院への進学を学部生に勧めていただくようお願いした。また、社会活動においてご一緒させていただいた他の大学のピアノ担当の先生方にも新たに本学の大学院について説明させていただいた。しかし，今回はピアノ関係で大学院に進学する学生はいなかった。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

附属学校においては、ロングホームルーム等の時間を使い、大学院生との演奏（ピアノ連弾）を聴かせ、実際の演奏に触れる機会を提供する。
社会においては財団法人日本ピアノ教育連盟や、財団法人三重県文化振興事業団の主催するコンクールやオーディション等の活動を通して、小・中・高校生のピアノ演奏に関する技術を向上させ、適切な音楽文化の発展に寄与する。

2．点検・評価

附属学校においては、ロングホームルームでピアノを演奏する大学院生にアドバイスをし、附属中学校での演奏会が充実したものとなるよう指導し，演奏会を成功させた。
社会においては財団法人日本ピアノ教育連盟の主催にするオーディションの関東甲信越地区大学部門や、財団法人三重県文化振興事業団の主催するコンクールの審査を通して、小・中・高校生のピアノ演奏に関する技術を向上させ、適切な音楽文化の発展に寄与した。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）